

育児をする母親の自己概念の変化

－ ポジティブな体験とネガティブな体験の両方の視点から －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
石田 育子

本研究の目的は、①育児をする母親の自己概念の多面性を明らかにすること、②自己概念の変化について育児をする母親がどのように感じているのかをポジティブな体験とネガティブな体験の両方を視野に入れ育児ストレスや育児不安との関連を検討していくことの2点である。今回の調査では、第一子が6～7歳の子どもをもつ母親4名を対象に、半構造化面接を行った。

主な結果として、複数名に共通点のあった育児体験を通しての自己概念のポジティブな変化は、「細かいことにこだわらない自分」「興味が広がる自分」の2つであり、ネガティブな変化は、「短気な自分」「潔癖な自分」「神経質な自分」「外出意欲の弱い自分」の4つであった。このことから母親の自己概念の変化は多面的であることが明らかになった。そして、自己概念の変化をネガティブに捉えることが、不安やストレスに繋がる可能性はあるが、不安やストレスに繋がるかどうかは育児をする母親の捉え方次第で異なることが示唆された。